

インドの短かい旅から (2)



随筆

*塙 輝雄

海外出張の楽しみはタイトなアカデミックビジネスの間隙を縫って行うエクスカージョン（わき道にそれるの意）に尽きるといってよい。自前のエクスカージョンこそ外国を知る最上の手段なのである。今回、エレファント島、エローラ、アジャンタを訪ねる計画を立てたのは、巨大な石窟寺院に身を置くという、現地以外では不可能な体験を望んだからに外ならない。まず、エレファント島から初めよう。

(5) エレファント島探訪

この島はガイドブックでは簡単に紹介されているのみであるが、ヒンドゥー教彫刻の最高傑作とされている三面のシバ神像が鎮座しているのである。島へ渡る舟はインド門付近から出帆すると書いてあったので、本を信用していたら最終の船に乗り損ねる所であった。付いて来てくれたプラサド教授が広場にたむろしている人々に聞き、“すぐ切符を買ってこのバスに乗ればバスはすぐ出発する”と教えてくれた。1人往復16Rsの乗船券を買って乗り込むと、バスの後方から切れかけたベルトが鉄板を叩いているような大音響が発生し、人ゴミの中をバックし始めた。何事かと思って窓外を見ると、一人の男が平手でバスのボディーを叩いていたのである。大群衆の中で大型バスの方向を変えるには最も効果のある手段であることはすぐ判った。バスは北方へ約15分走り、ゴア行きのフェリーが出る栈橋に到着、程なく貧相なポンポン蒸気が船だまりの間から現われ相客8人と私共夫婦を乗せて出港した。油を流したように波一つないアラビア海は午後の強烈な日光を照り返し、日除

けの板屋根も効果が無く、船足が遅いので風も起らず気分が悪くなりかけたころ、1時間10分で約8kmの航海を終えて島に到着した。

島から100m位海上に突出た栈橋の先端で船から降り、島に向かって歩き出すと、やっと二人が擦れ違える位の栈橋の中間が水没しているのではないかと、ハダシになって渡る以外に方法はない。しかしそこはインドである。一人のオパサンが待っていて妻の荷物を持ち、手を取って誘導し1Rsのチップを忽ちかせいでしまった。

島の頂上の石窟までは土産物屋が並ぶ坂道を約400m位登らねばならないが、木が茂っているので大して暑くはない。途中猿がしきりに出没するが箕面の猿のように厚かましい奴はいない。坂の途中で数人のヨーロッパ人と擦れ違っ



エレファント島、正面頂上近くに石窟がある



エレファント島の石窟

*塙 輝雄 (Teruo HANAWA), 大阪工業大学一般教育科, 教授, 大阪大学名誉教授, 理学博士, 表面物理



エレファンタ島、踊るシバ像

た程度で石窟も殆んど人影がない。最初に見た石窟はそれまで抱いていた洞穴といったイメージから程遠いもので、堂々たる石造の寺院といった風格があった。写真に見られるように巨大な玄武岩塊をくりぬいて列柱で支えられた空間を創り出したもので、その莫大な労働力を注ぎ込む原動力は一体何だったのかと思う、人は簡単に宗教の力と云うが、私共宗教心の薄い日本人にとっては想像も出来ない。

目指す三面のシバ神像はすぐ見付かった。洞内の壁には数々の見事な彫刻が見られるが、強力な威厳を放射する5mを越す神像を一目見れば、誰でもそれと判る筈である。一説によれば正面の顔は創造者としてのシバ神を、向って右側は守護者、左側は破壊者を表現しているという、低い鼻と分厚い唇は三面共通であるが各々相貌は異なり、説通りに見えなくもない。異説によれば中心はヴィシュヌ、右がシバ、左がパールヴァティであると言うが、私は「肉感的で力に満ちあふれた表情を持ち、唇は快樂の泉に似……」と言ったロダンの印象に共感する。島に渡る余裕のない人は、プリンスオブウェールズ博物館で島から持出された若干の石像を見ることは出来るが、石窟の中での名状し難い感覚は望むべくもない。

ほの暗い石窟から、広場に出ると、眼下には静かにアラビア海が波もなく広がり、対岸の緑の山々が見渡せ、仲々の風光である。と、数名

のオバサン達が頭上に水壺を乗せて私共の周りをゆらゆらと往来し出した。有料モデルに違いないと思ったので、写真を撮らなかった。しかし今になって見ると、写しまくって若干のチップを置いて来れば良かったと思う。

帰りは干潮となって、1時間前には水没していた栈橋も海面上に姿を現わし、例のオバサンの姿は消えていた。帰りの船は調子が良く45分の航海で出発点に戻った。タクシーを待っていると、同船したインド人の一人が相乗りさせてくれた。彼は小さなプラスチック工場を営んでいると言い、これからインドはプラスチックの時代になると意気軒昂な所を見せつつも、インドの労働者の怠惰さをボヤキ、料金はどうしても受取らずに去って行った。

あとで思い出して見ると、島への往復の船中で一緒になった人々は、皆キチンとした身なりをしていた。現地の人々にとってエレファンタ島は単なるピクニックの場所ではなく、今なお信仰の聖地となっているのであろう。

(6) オーランガバードからエローラへ

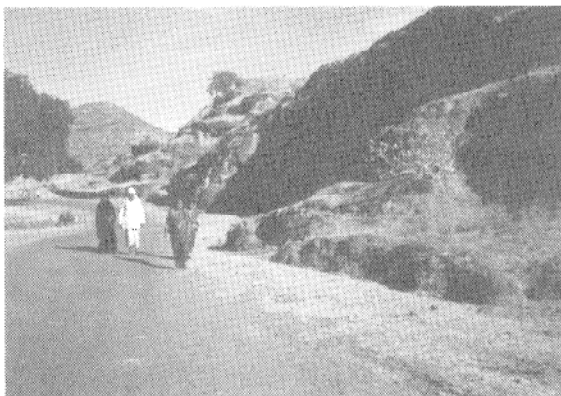
エローラ、アジャンタへ訪ねるにはまずオーランガバードに行かねばならない。幸いオーランガバードはボンベイ〜デリー間の空路の途中にありストップオーバー可能である。12月5日(土曜日)の定刻6時20分、満員の乗客を乗せたB737機は朝モヤの中を離陸し30分の飛行でオーランガバード空港に到着した。驚いた事に荷物を受取ってロビーに出ると一人の小太りのインド婦人が近づきミスターハナワかと尋ね予約してあったラマホテルから迎えに来たとの事であった。彼女はホテルで旅行業を営むサレームと名乗り、ホテルに着くまで10分程の間にエローラアジャンタを1日で見物するにはタクシーでなければ不可能であると言い、車とガイドの予約を取り付けた。ホテルでチェックインするとき、大阪で払込んだ宿泊料は受取っていないと言われた。現地払いの方が遥かに安いので前金は大阪で返してもらうことにした。私共はすぐインド式朝食をとり、サレームさんに車代ガイド料を支払い8時15分に出発というまことに効率的な滑り出しであった。日本語のガイド

は英語のガイドより3割増しとの事であったが構わず予約した。総費用はチップも入れて1万円を少々越える位であったが、ここでは値切ることはしなかった。

車に乗って見ると先刻空港から乗せてもらったアンパサダーで運転手も同じ人物であった。聞くと車はサレームさんの所有で運転手も専属であった。西の方はかなり離れた所に住んでいるガイドをピックアップする必要上、コースはエローラを先にすることにした。ガイドは30代位の青年でカーンと名乗り、日本語はボンベイで覚え、今までかなりの日本人観光客を案内したと言ったが、かなり怪しい水準であった。また彼は、仕事があるのは12月から3カ月位で、その収入で一年間暮さねばならないとボヤいた。

市街地を離れると、乾期の荒涼としたデカン高原のイメージとは異なり、意外に緑の多い風景で、何回となく濃い緑のトンネルをくぐった。それはバニアの並木道で、生命力の旺盛なこの木の枝から無数に垂れ下る気根を切り払って車が通れる穴を開けたものであった。遠くには頂上の平らなメサが見られ、アメリカ西部によく似ていると感じながら約30km離れたエローラに到着したのは9時半であった。石窟はほぼ南北に走る溶岩の丘の裾に掘削されて居り南から順に番号が付けられている。第1から第12窟までが仏教、13から29までがヒन्दウー教、30から34までがジャイナ教のものとなって居り、製作年代もこの順で5世紀から10世紀以降に及ぶと推定されている。

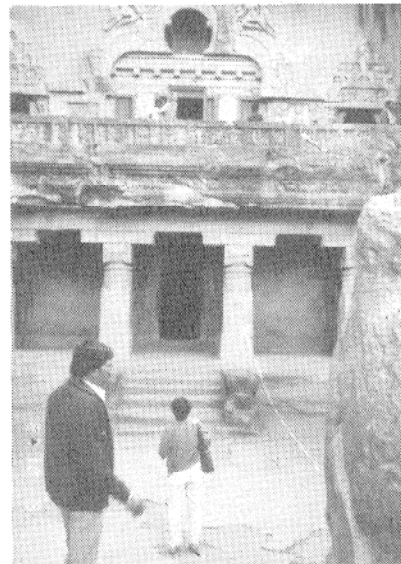
仏教窟では定石通り第10、第12窟に入った。前者はチャイティヤと呼ばれる祠堂で2階は吹



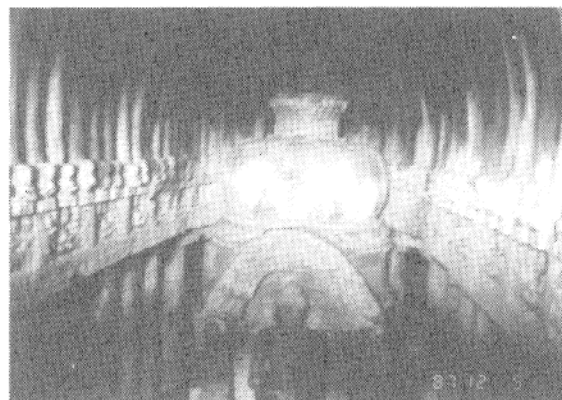
エローラ、石窟前の道路。左の大木はボダイ樹

抜きとなって天井はアーチとなっている。

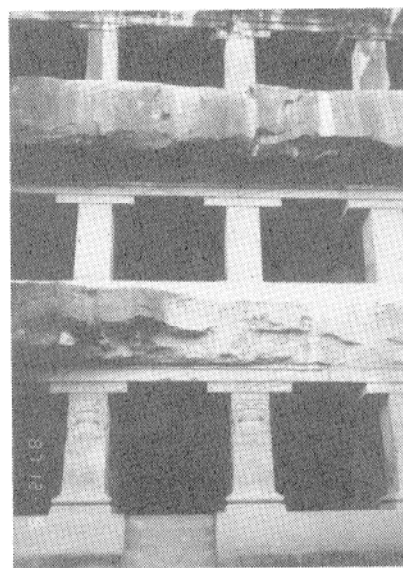
奥には仏舎利を安置した8m位の高さのストゥーパ(仏塔)が立ち、その前には椅子に座ったブッダの像が彫り出されている。8mの高さと



エローラ第10窟正面



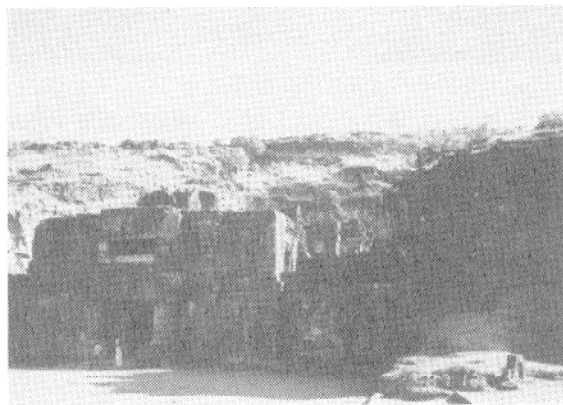
エローラ、第10窟内部



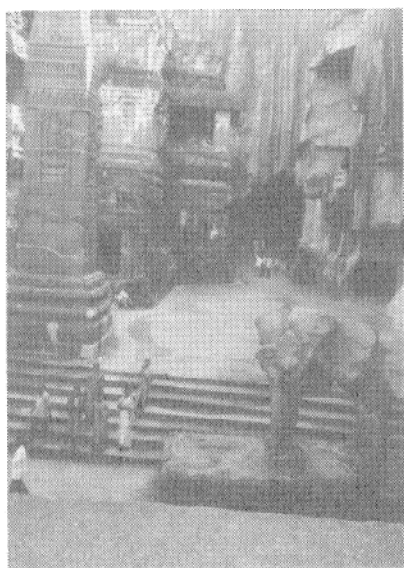
エローラ第12窟

言えば東大寺南門の仁王さんの高さ位で、大して大きなものではないが、あらゆる壁面を飾る精緻な彫刻には驚嘆を禁じ得ない。第10窟より1世紀後の8世紀に造られたと推定される第12窟はヴィハーラと呼ばれる僧院で、3層となっている。1階は3列の柱で支えられた広間、2・3階も3列の柱の並んだ広間で、左右にブツダの座像が並んでいる。この窟は前者より大きいですが、造作は劣るように思われた。ただし西に面した開口部は大きく、夕日が洞の奥まで差し込んだ時の光の効果を計算して造られているような気がする。もう一度来る機会があれば、夕方訪ねて見たいと思う。

エローラの圧巻は何といっても第16窟、カイラーサナータ寺院に尽きる。これは岩壁を横から掘ったのではなく、上から下に向かって掘り出した作品で8世紀半ばごろから100年以上かけて掘り出した石の量は20万トンに達すると言わ



エローラ、第16窟カイラーサナータ寺院



エローラ、カイラーサナータ寺院内部



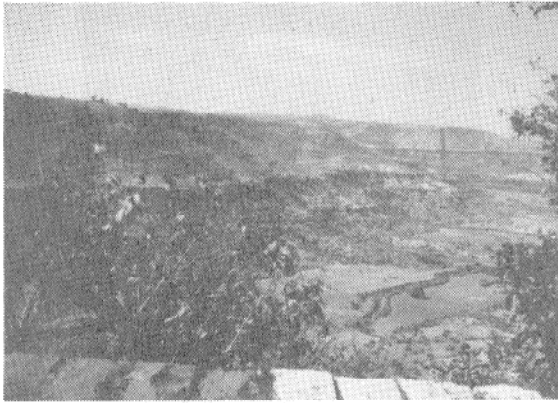
エローラ、ジャイナ教窟、幸運の女神

れている。本堂は高さ32m、奥行50m、幅33mの大きさがあるとされているが、平地に建っているのではなく丘の割目に挟まっているので外から見れば大して感動を与えるものではない。奈良の大仏殿の方が遥かに巨大である。しかし一歩外壁から内へ入ると、垂直にそそり立つ岩壁と精妙な彫刻で飾られた巨大な岩塊の重量感に圧倒されてしまう。全く失敗の許されない掘削と彫刻を何代にもわたって続けることの出来た人々はどんなシステムの元で働いていたのであろうか。

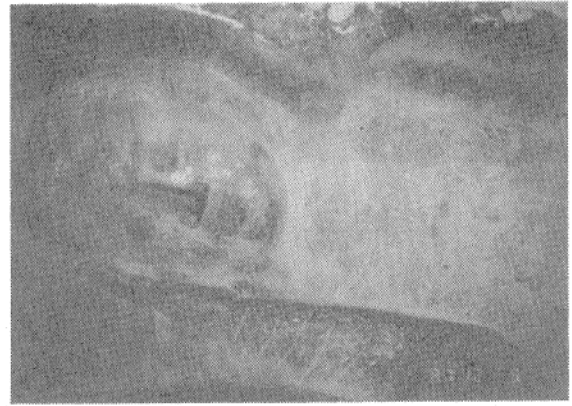
最後に約2km離れたジャイナ教の石窟まで車で行った。ここにある石像は実に美しい線を出して居り、一つの技術的頂点に達していると思われ、見逃すことは出来ないものである。興味を惹いたのは財運の女神と幸運の女神、それにジャイナ教の聖人マハーヴィーラの立像の一部が黒光りしていることであつた。これは多数の人々の手が触れたことを意味して居り、ジャイナ教の石窟のみに見られた。この教えは仏教と異なり、今でも信仰者の多いことを物語っている。

(7) アジャンタ

エローラで1時間を費やした後、再び西部劇の舞台のような風景の中を2時間余り走って、12時半にアジャンタに到着した。まず行き止り



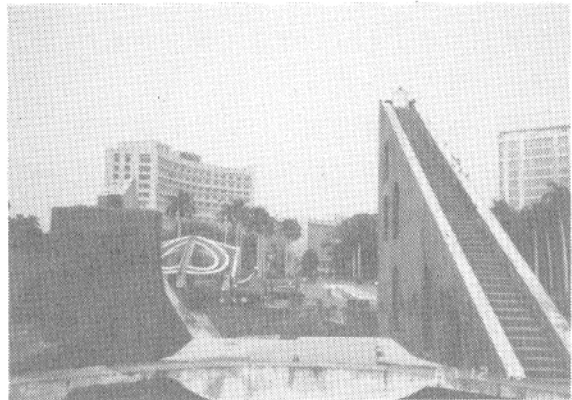
デカン高原、アジャンタへの道



アジャンタ26窟，涅槃仏



アジャンタ石窟群



ジャンタルマンタル (1726年完成)，ニューデリー，
コンノート広場に近い所にある。開閉門時刻に注意



アジャンタ第19窟(5世紀)ストウーパ

の広場に面して建っているAJANTA RESTAURANT & TRAVERER'S LODGE に入り昼食をとる。料理は決まって居り、チキンカレーと野菜のカレー煮、生玉ネギの輪切りにライス、チャパティの組合わせで2人前、税、サービス料込みで38.1Rs, ビール1本19.8Rsであった。用心のため持参したアルコールティッシュで食

器類を拭ってから食べたが、そこまでする必要があったか否かは判らない。店を出る前に便所に行った所、廊下の扉に警告と書いた板が下っていた。近づいて見ると“森には虎や狼が住んでいるので日没後は外をうろつかないように”と書いてあった。

石窟は広場の背後の丘を5分ばかり登って越した所から眼前に展開する。それらは手前から順に番号が付けられ、29窟に及ぶ。

なお岩質はエローラと同じく気泡と析出物の多いこげ茶色であった。アジャンタの名を高からしめた壁画は6世紀に作られた第1, 2窟に集中し、5世紀のものは16, 17窟にある。第1窟は最も素晴らしいものであるがかなりの脱落がある。画の下地は牛糞と泥と石灰をこねて粗面化させた岩面に塗り付けたものと言われ、千年以上経った今では極めて弱くなっているであろう。この窟だけは扉が付けられ、1回20人しか入れないのである。法隆寺の焼けた金堂の壁画の原画ではないかと言われている蓮の花を持ったボサツや、黒いプリンセス、を始めとし

この窟の奥の壁面に残された女性達の豊かな乳房、細くくびれた腰、豊満な下腹部の何という魅力的な曲線美であることか、且つては壁面すべてが、このような絵で埋め尽くされていたと言われているので、往時はさぞ華やかで、濃密な官能の香りに満たされていたことであろう。ここが僧達の修業の場であったとは到底思えない。恐らく裕福な寄進者と僧侶との交際のサロンとなっていたのではなかろうか。今は人里離れた場所であるが、昔はインド西岸とガンジス流域を結ぶ通商路が近くを通過していたことと、仏教の盛時であったので、僧達のゼイタクな生活を支え得たのであろうと思う。しかし、間もなくインドで大乘仏教が消失してしまったことを考えると、ここは仏教芸術の最後の花開いた場所かも知れない。アジャンタでは紀元前に掘られた質素な窟もいくつか見られるので訪ねた人はそれぞれ得る所が大きいと思われる。すべてをゆっくり見れば丸一日かかると思われるが、私共はここで2時間余を費やし、3時近くに帰路についた。途中、ROCK SHOPとヒーム

ローの織元に案内され、そこでガイドと別れ、ホテルに戻った時は6時近くなっていた。

あ と が き

与えられた紙数を超過してしまったが、拙文が超一級の芸術に触れるため西インドを訪ねる人々を増やす機縁となれば幸いである。ニューデリや、アグラに関しては情報が満ち溢れているので省略し、デリー中心部にあるジャンタルマンタルという昔の天文観測所の写真だけを示しておく。学会に参加した人でここを訪ねた人が殆んど居なかったのは、ガイドブックで余りにも簡単に記されているためであろうか。茶色と白で構成された巨大なオブジェは実に斬新で一見の価値は充分あると思う。最後に健康管理の点で一言付け加えておくと、最も不可解なものはコレラの予防注射である。これはインドでも稀な劇性コレラにのみ効果を示すものであるから、不必要どころか、油断を誘ってエルツールコレラにかかる率を高めているように思われる。